

白山の自然誌 8

ニホンザルの四季



石川県白山自然保護センター

はじめに

「白山でよく知られている野生動物は」と聞かれれば、多くの人が「サル、クマ、カモシカ」と答えるでしょう。古くはどれも、山村の住民や猟師には身近な動物であり、時には食用や薬用になり、時には焼畑の迷惑者として追いはらわれていました。なかでもニホンザルは、さまざまな民話や書物にも登場し、白山猿と書かれたものもありました。しかし、その生息の概要や生態が調べられ写真などととも紹介されるようになったのは、昭和30年代後半になってからのことでした。そして昭和41年からは、吉野谷村中宮温泉近くのジライ谷野猿広場で餌付けされた群れを近くで観察できるようになり、近年は、多くの人に親しまれています。

ニホンザルの社会や生態の研究が、世界のサル類に先がけて進んだなかで、白山のニホンザルでも、餌付けをきっかけにして、いろいろな調査がなされてきました。まだまだ分らないことが多いとはいえ、他の動物と比べれば、群れの分布域や個体数、雪の中での生活などがほぼ明らかとなっています。

日本各地、本州・四国・九州に広くニホンザルが分布しているけれども、白山がひととき注目されているのは、一つには、もともと熱帯地方に多いはずのサルの仲間のうちで、多雪地に生きるものは、極めて珍しいからです。もう一つは、白山の石川県側には、多くのサルの群れが隣接して分布していて、人間の圧力をあまり受けずに、自然な遊動をしているということでしょう。

近年は、白山山系のニホンザルの群れが増えつつあり、その遊動域が人家や畑近くにまで広がってきたため、被害の起こる心配もできています。

ニホンザルに親しみを深めていただくと同時に、自然の豊かさの象徴ともいえるニホンザルとのつきあいかたについて考える材料にもなればと、この小冊子をまとめました。

ニホンザル *Macaca fuscata fuscata*

[霊長目 Primates]

[オナガザル科 Cercopithecidae]

も く じ

春

若草・若葉の中で

新しい命の誕生	2
豊かな食べ物	4

夏

緑濃い野猿広場で

カムリA群	6
子供の成長	8
ジライ谷野猿広場	9

秋

全山紅葉の中で

木の実で冬に備える	10
季節移動	12
オスの生活	13

冬

大雪のブナオ山で

食べ物不足に耐える	14
群れの分布	16
寿命	18
ブナオ山観察舎	19

サルとのつきあいかた	20
------------------	----

新しい命の誕生

白山の春は、突然やってきます。4月下旬に暖かい風が吹くと、草木が一斉に芽を吹き、長い冬を耐えぬいてきたサルにとって、豊かな季節の訪れです。急斜面で雪崩が落ちやすく雪が積っていない南向き斜面の芽吹きが最も早く、ハクサンアザミ、オオイタドリ、ヤマヨモギなどは、サルの大好物です。

母親は、この豊かな季節に子育てをします。白山では、まだ雪の残っている3月に出産が始まり、6月まで続きます。なかでも4月下旬から5月上旬にかけて、多くのアカンボウが生まれます。

この季節に出産することには、もうひとつの意味があります。サルにとって最も厳しい季節である冬までに少しでも成長し、体力をつけておくため、秋の木の実の豊かな季節ではなく、春に生れるようになっているわけです。早春にまとまってアカンボウが生れる傾向は、雪国のサルに特有のもので、同じニホンザルでも南日本のものは、春から夏にかけて生れます。妊娠期間約180日として、10月から11月にかけて、早春の出産に合わせるように交尾期を迎えているのは、驚くべき適応力といえます。

じつは、雪国のほとんどの動物は、サルと同じ理由で、春一番に子育てをしています。ツキノワグマは、冬眠中に小さな子を産み、春には育ち盛りの大きさになっています。ニホンカモシカは、5月から6月にすぐに歩けるくらいの



4月には、残雪の中で次つぎにアカンボウが生れる



サルの双子は珍しく、これまでに白山では2例が見られた

大きな子が生れ、まもなく自力でどんどん食べて成長します。

ニホンザルは、ふつう1回に1頭の子を産みます。まれには双子が生れることもあります。これまでに白山で観察されたのは2例だけでした。そのいずれも、子育てには失敗しています。母親の体力を考えても、群れの移動に付いていくためにも、やはり一頭を育てるのが精一杯なのでしょう。

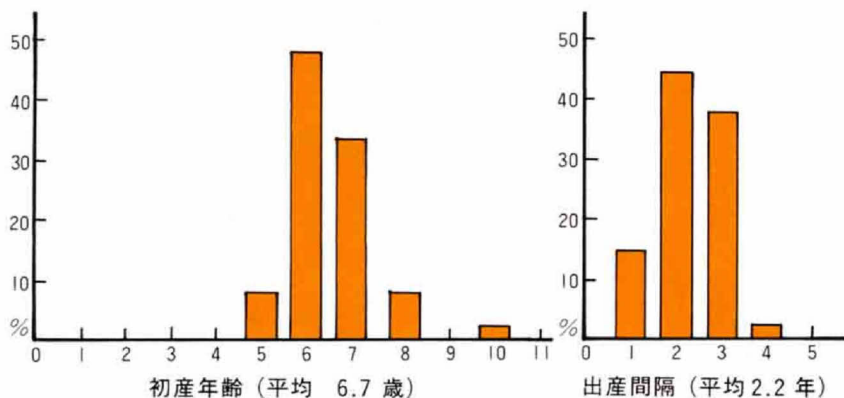
オトナメスは、毎年出産するわけではありません。前年に子を持っているときは、続けて妊娠することは少なく、多くのメスは1年おきに子育てしています。カムリA群の記録を見ると、なかには続けて産んだり、3年目に産むものもいて、平均では2.2年に一回でした。そのために群れ全体では、1年おきにいわゆるベビーブームがみられる傾向があります。

おもに夜または早朝の群れの移動しないときに出産しているようです。野猿広場に出てきたときに、まだ身体がぬれていて、へその緒のついているアカンボウを見かけることがあります。しかし、昼間に餌付け場近くで出産したのを見たことがありません。

アカンボウは、生れてすぐに手足で母親の腹の毛をつかみ、ぶらさがる力を持っています。これも、集団から離れては危険が多く、群れをなし移動しながらくらすサルに与えられた能力です。



一度乳を吸った子が死んでもなかなか放さない



春

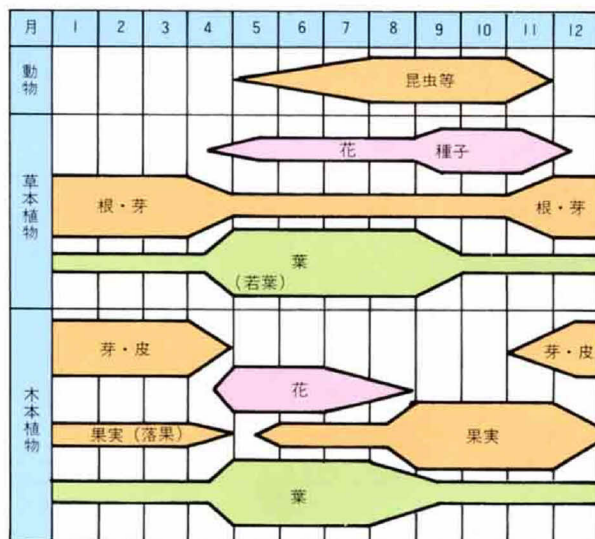
豊かな食べ物

ニホンザルは、草木の葉、果実、種子、そして昆虫類など幅広いメニューを持っている動物です。しかし、実際に食べているものは、ほとんどが植物性のものであり、生態的にいうと植物食といってもよいくらいです。多くの食べ物があるとはいっても、白山のように四季がはっきりしているところでは、季節によっておのずから食べられる物は限られ、主食も季節によって大きく変化します。

春には、若草・若葉がふんだんにあり、なかでもハクサンアザミやカエデ類の葉を好みます。ヤマザクラ、ブナなどの花も見逃しません。白山では、低山から標高1500mくらいまで2か月以上にわたって、雪どけのあとに次つぎと若草が芽を吹きます。それらを求めて歩くので、サルは長い期間、早春を楽しんでいるともいえます。

夏には、全山緑におおわれるので、特に毒があるとか、アクが強すぎる物を除いて、あらゆる草木の葉や芽、花、果実、種子などを食べています。また、カブトムシやセミ類などの昆虫、サワガニや湿地にいる水生昆虫、さらにはカツムリまで、機会があればいろいろな動物性の食物も採ります。

白山のニホンザルの
主な食べ物

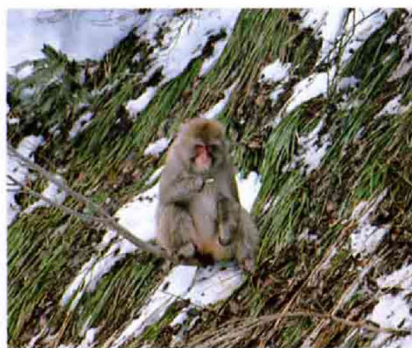




春を迎えた群れが日当りの良い斜面で若草の芽吹きを待っている



日当りの良い急斜面にできた草原はカモシカにとっても大切な食卓



芽の伸びるのが待ちきれず、ススキの株から軟らかい芽を採る



芽吹きが早く、豊富にあり、サルの好物でもあるハクサンアザミ



昆虫やカタツムリなどの動物性の食べ物も、機会があれば採っている



春から夏にかけて、ハギなどさまざまな植物の葉が主食になる



緑深い野猿広場で

カムリA群

昭和41年から、カムリ山（冬瓜山）を遊動域にしていた群れが餌付けされ、ジライ谷で観察できるようになりました。

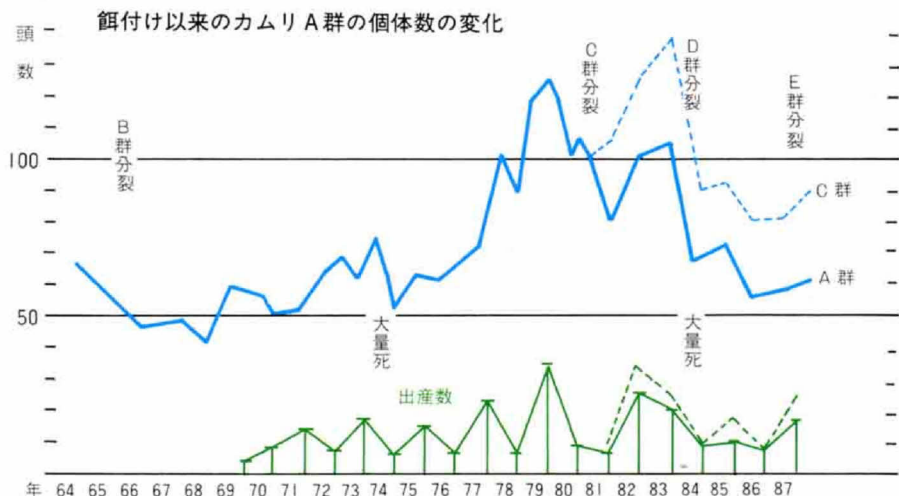
初めは約60頭だったものが、餌付け場に来るようになったのは44頭で、カムリA群となりました。残りは人間との接触をきらいB群となって、やがてどこかへ消えていきました。

餌付け後、数が少しずつ増え、昭和53年頃には100頭を越える大群になりました。昭和56年には分裂が起こり、23頭のカムリC群ができました。C群は、A群の上流側にあたるシリタカ谷を中心に遊動し、A群がいないとき餌場に出できます。

また昭和59年には12頭のD群が、昭和62年には7頭のE群がそれぞれA群から分裂によって生まれました。これら2群は、餌場へは近づかず、A群よりも蛇谷の下流側に遊動域をかまえています。



餌付け開始当時の野猿広場



餌場とその周辺では、一頭一頭のサルに名前がつけられ、行動や生態の観察が続けられています。

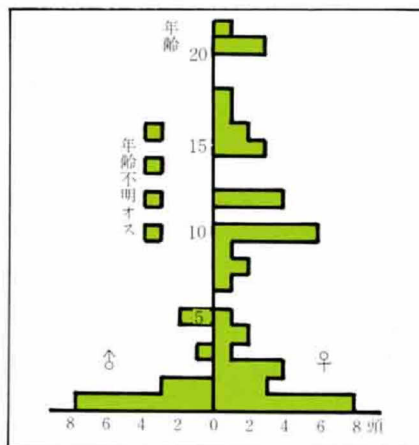
昭和62年夏のカムリA群の個体数は62頭でした。そのうちオトナオスは4頭、オトナメスは25頭、アカンボウが16頭でした。

サルの社会は、母親とその子や孫たちといった、血縁によって強く結ばれた母系家族が基本になっています。いくつかの家系が集まったところへ、何頭かのオスが加わって、群れが出来上がっていると考えられています。

オス、メスそれぞれには、比較的安定した順位があり、むだなけんかをしないですむようになっています。餌場の中央で尾を挙げ、肩をはっているのは、第1位のオスです。上位のオスは、群れの中で混乱があったり、外部からの侵入者があったりすると、とんでいって追い払おうとします。そのような激しい行動は、餌場のように、群れが1か所へ集中したときに多くなりますが、山の中で、群れが広がって採食しているようなときには、ほとんど見られません。



昭和59年以来カムリA群の第1位オスである「トソ」



カムリA群の性・年齢別構成 (昭和62年8月)

餌場では、加工しない大豆、小麦、トウモロコシだけをひかえめに与え、できるだけ食べ物は周辺の山で採らすようにしています。また、雪が降って中宮温泉や白山自然保護センター中宮展示館が閉鎖される冬の間は餌を与えていません。

来園者から、または餌場以外では、小さい餌を与えないようにしているのも、加工食品の味を覚えて野性を失うことのないようにとの配慮によるものです。いつまでもたくましい野生のサルであるよう、皆様の理解と協力を望んでいます。



子供の成長

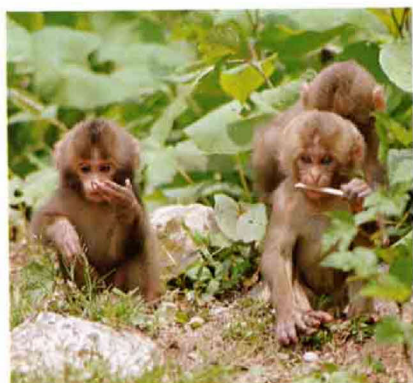
アカンボウは生れてすぐに手足で母親の腹にぶらさがることにはできますが、まだ四つ足で立つことはできません。生後約1か月でよちよち歩きができるようになって、なかなか母親のもとを離れようとはしません。2か月くらいまでは、母親がひとときも目を離すことなく、守ってやります。

歩きまわれるようになると、他のアカンボウ達と遊ぶようになります。夏には、姉や兄とともに子供集団を作って、レスリングやオニゴッコをしているのがよく見られます。そんな時に、近くに群れのオトナオスが見守っていることがあります。姉さんはよく弟や妹の面倒をみて遊んでやりますが、オトナメスは自分の子以外のアカンボウの世話をすることはまずありません。

親子が少し離れているときに、何か危険やけんかが起こったりすると、どちらかの叫び声で、すぐに母親の胸の中へとびこみます。

母子が休んでいるとき、他のサルも何頭か集まって、毛づくろい(グルーミング)をしているところがよく見られます。それらは母親とその子供たちを中心とした、母系家族といってよい集団です。

生れてから4か月もすると、母のまねをして軟らかい草などを食べてみるようになります。母の乳房に吸いつくのは、約半年から1年ほども続きますが、秋になると母乳よりも自分で探して食べる物のほうが重要になります。



生れて数か月、親から離れて子供だけの遊びなかができる



子供は水に飛び込んで遊ぶがオトナはめったに遊ばない

ジライ谷野猿広場

吉野谷村中宮温泉、白山スーパー林道有料区間入口の近くにある、白山自然保護センター中宮展示館から、自然観察路を約20分のところに、野猿広場があります。4月下旬から11月上旬までの毎日、サルを観察できるようになっています。

カムリA群またはC群が広場へ出てきますが、野生の群れのため、ときにはサルのいないこともあります。7月から8月にはほとんど毎日見られます。

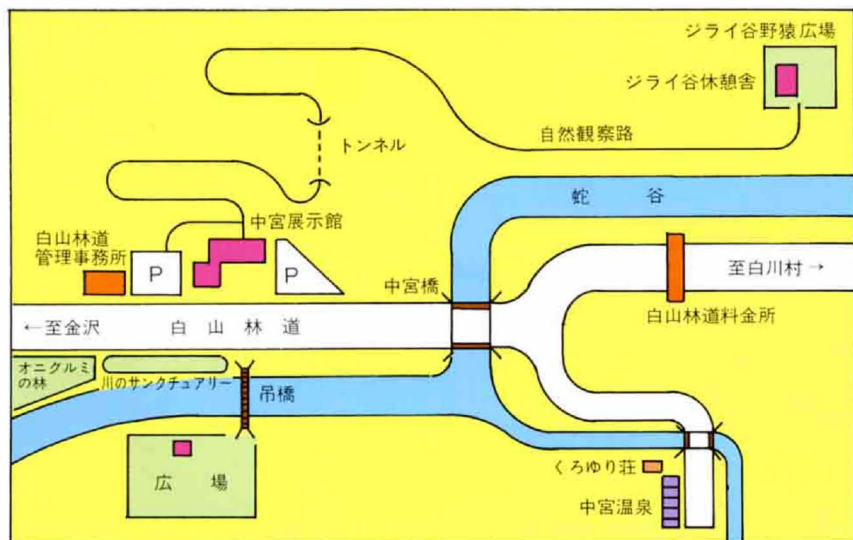
観察にあたって

サルの目をにらんだり手を出したりすることは、攻撃を意味し、反撃され危険なこともあります。静かに観察してください。

管理人が与える以外に、食べ物は絶対にやらないでください。また、果物や穀物を見せると、とびつかれることもあります。



ジライ谷野猿広場





全山紅葉の中で

木の実で冬に備える

秋は、春と並んでサルにとっては食べ物の豊かな季節です。ミズキ、ヤマブドウ、サルナシ、キイチゴ類などの甘い果実が熟し、オニグルミ、ツノハシバミなど脂肪の多い実も成ります。

なかでもサルの好物であり、栄養価も高いのは、ブナの実です。ブナ林に実が成ると、サルはそこを離れようとはせず、野猿広場へもやって来なくなります。しかし、残念なことには、ブナは毎年実をつけるわけではなく、5年から

10年に一度大豊作があるかとおもうと、山にまったくブナの実の無い年が続くこともあります。いかにブナの実が好物で重要かという証拠には、豊作年には、カムリA群が9月から10月にかけて、ほとんど餌場へ姿を見せなくなることもわかります。



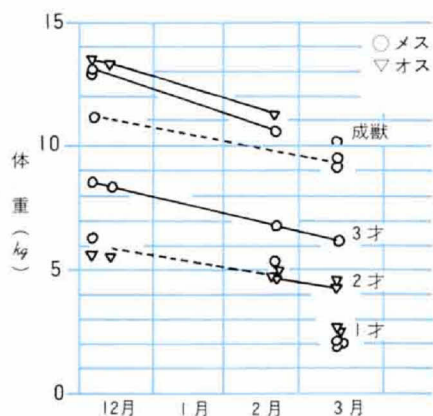
ブナの実は、美味しくて栄養価も高い



ブナの実は好物の一つだが、実をつけるのは数年に一度しかない

多雪地のサルにとっては、秋に食べられるカロリーの高いクルミやドングリは、やがてやってくる厳しい冬を乗りきれよう、皮下脂肪を貯え、体力をつけておくため、たいへん重要なものなのです。そのため、山のいろいろな木の実が不作の秋には、サルたちが無事冬を越せるのかと、心配になります。

ブナやナラのドングリなどの堅い実は、冬に雪の割れ目から拾い、春には若葉の出るまで雪の消えたところで食べられるものでもあります。



冬の体重減少



この若オスは、秋に14kgあったのが冬には11kgになった

秋の実りの季節には、たっぷり食べて皮下脂肪を貯え、サルはまるまると太ります。一年で最も体重が重くなるのが、秋の終り頃です。

貯えは冬になると少しずつ使われ、体重も減っていきます。いくつかのサルの体重を計ってみると、オトナメスは冬の始めに12kgから13kgだったものが、冬の終り頃には、10kgから11kgにまで減っていました。豪雪で春到来の遅い年に、栄養失調で死んだものは、8kgくらいになっていました。

オスや子供は、一頭一頭の体重に違いが大きいのに対し、オトナメスは、比較的体重はそろっています。同じニホンザルでも、白山のものは、秋の太った時に12kgから13kgもありましたが、暖かい地方では、10kg以下のものが多くみられます。

白山のものは、長野県や青森県のものと同様に似ていて、どちらかというと大がらなサルだといえます。寒さが厳しく、食べ物の少ない環境に耐えるためには身体が大きいほうが有利だとも考えられています。



秋の野猿広場



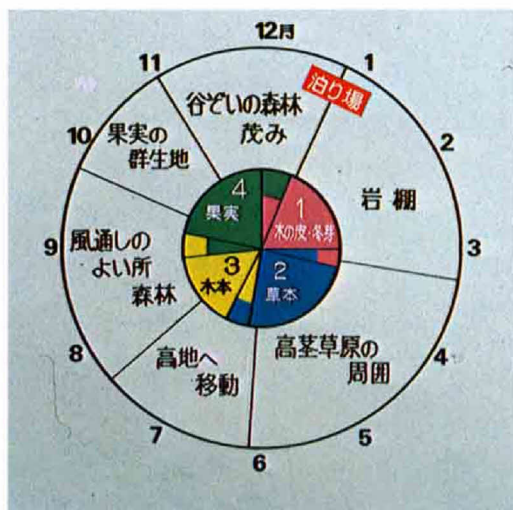
季節移動

白山のサルの群れは、夏にはブナ林帯の上部にあたる標高1000から1500mの地帯で生活しています。これまでに最も高いところで観察されたのは、登山道中宮道のゴマ平、標高1800mのところでした。そこまで行くと、人間の存在に気がつかう必要もなく、サルの好みの食べ物の豊かな落葉広葉樹林と草原が広がっています。

しかし、冬になると寒さは厳しく、雪も深いので、高山で過ごすことはできません。秋に紅葉や木の実の熟すのは、山の高いところから始まり少しずつ降りてきます。それを追うように、9月から10月にかけてサルも低山へ移動します。白山麓の標高500mくらいのところで、平年で11月下旬には積雪がみられるようになります。それから春までは、谷沿いの急斜面を中心にして生活します。

多くの群れの遊動域を一年をとおして重ねあわせると、冬の谷ぞいの集中域から、夏に利用される周辺の山へと、遊動域が放射状に花びらをひろげた花のようになっていることがわかります。

一つの群れの遊動域は、標高500mあたりの谷間から、1500mあたりの尾根筋まで、細長い範囲になります。一里野温泉から中ノ川沿いに、ゴマ平まで季節移動をするタイコ群の一つは、水平距離でも約8kmを行き来していることになります。



白山のニホンザルの食べ物と生活場所 (林原図)

オスの生活

ニホンザルの社会では、オスとメスでは一生の過ごし方が大きく違います。メスは母親から離れることはあまりなく、生れた群れで一生を送ります。しかし、オスは、思春期である3才から5才になると、ほとんどのものが群れを離れていきます。一度群れを離れたオスは、一頭だけでハナレザルになって歩き回るものや、2~10頭くらいのオスグループを作るものもいます。

カムリA群でよく人に慣れて育ったオスは、群れを離れてからもあまり人を恐れないので、他の群れに付いていても、ときどき人に近づいていくことがあります。餌場で顔などに特徴が観察されていたオスで、はるか遠くの群れに付いているのが何年かしてから発見される場合もあります。

一度群れを去ったオスは、成長してからも、生れた群れへもどることは少なく、他の群れに付くことが多いとされています。また、一つの群れに入って落ちつくものや、群れから群れへと渡り歩くものもいます。メスは残り、オスが



カムリA群生れで他の群れについていたオス



発情・交尾は、中秋から雪が降るまでの間に見られる

別の群れへ移っていくことは、結果的に近親交配を避ける重要な意味を持っています。

ハナレザルは、しばしば遠くまで移動することがあります。加賀市や金沢市に一匹のサルが出たという話題になるのは、そのようなオスです。

昭和61年から62年にかけ能登半島の先端までハナレザルが来たこともありました。これが、白山山系の群れからとびだしたオスと考えると、一番近いところからでも、えんえんと100km以上も仲間を求めてさまよったことになります。



大雪のブナオ山にて

食べ物不足に耐える

北陸地方の山地に生息するニホンザルは、世界で最も雪の深いところに住むサルだといっても過言ではありません。長く厳しい冬の寒さと飢えにたちむかっています。

寒さに対しては、厚い皮下脂肪と長い毛が体温を保護してくれています。サルにとっては、寒さもさることながら、やはり、食物不足をどうして乗りきればよいか最大の問題です。山は雪に覆われ木の葉は散ってしまっていては、何を食べていけばよいのでしょうか。

雪の上に出ている木の枝から樹皮や芽を採って食べます。カエデ・サクラ類などさまざまな木の冬芽をつまんで食べています。フジやケヤキの皮はむきやすい



雪の上を歩くときは、他のサルの後が歩きやすい



手足とも親指が離れるのは白山ではサルだけだ



中宮温泉の泉源は最高の休み場になる



雪の割れ目で食べるササは、冬でも栄養価が高い

のでよく食べている植物です。

しかし、樹皮と芽だけでは量も栄養も十分だとは思えません。それを補うように、川のふちや雪崩の跡で地表が現われているところへやってきます。そこには、クズなどの根、ヨシやスキの根や芽があり、スゲやササの緑の葉もあります。

本当に寒い日には雪の下になっていて、緑の葉が凍ったり乾燥したりせず、少し暖かくなると雪の割れ目から顔を出すので、冬でも高い栄養価を保存しています。

また、林の下に雪の割れ目があれば、秋に落ちていたドングリなどの木の实を拾うこともできます。

冬にはサルが、地形の急なところを選んで生活するのは、天敵から逃れることと同時に、食物確保のためにも意味のあることなのです。



土を掘って採ったヨシの根を
水できれいに洗って食べる



フジの皮はむきやすい



雪の積らない沢でクルミを拾う
が、大きいサルしか割れない



木の枝に付いた地衣類



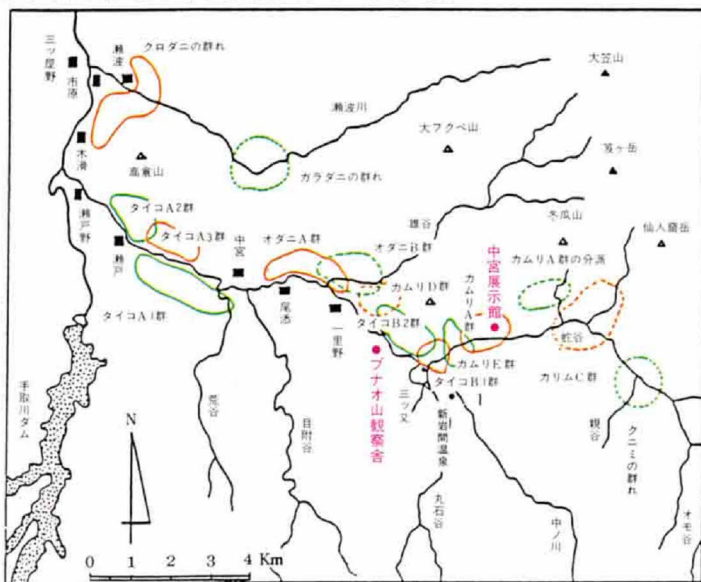
群れの分布

もともとニホンサルは、いろいろな物を食べることができ、寒さにも強いので、この地方ではどこにでもすめる動物ということが出来ます。今では分布のみられない能登半島にもサルがいたことは、猿山、猿橋村といった地名にも残っています。最後は、いまの門前町に、明治時代まで群れがいました。

白山山系をみると、浅野川・犀川の上流地域、手取川流域そして梯川上流と広い範囲にサルがいたという情報があります。岐阜県、富山県側でも、庄川流域には、昭和の初めまでサルを獲ったという話が広く伝えられています。

人に追われ、サルの群れが山奥にだけしかいなくなったのは、約80年前のことでした。その頃には、人がほとんど入れない険しい地形のところだけに群れが残っていました。手取川の上流、尾添川でみると中宮温泉あたりから奥だけでした。

昭和30年代に、山での焼畑や炭焼きが急に無くなり、サルは再び少しずつ分布を広げてきました。白山での調査により初めてサルの分布状況がまとめられたのは、昭和45年のことでした。その頃には、夏には谷の奥深く生活している群れが、冬には現在の一里野温泉近くまで現わるようになりました。当時のサルの数は、約11群 300頭と推定されていました。



白山山系、手取川流域におけるニホンサルの群れの冬の遊動域

近年は人がサルを追い払うことは少なく、次第に個体数が増えると同時に、分裂によって群れの数も増え、遊動範囲は人家や畑の多い下流方向へますます広がりつつあります。尾添川・瀬波川の流域では、スキー場や集落をとり囲むように群れが連続して分布するようになってきました。

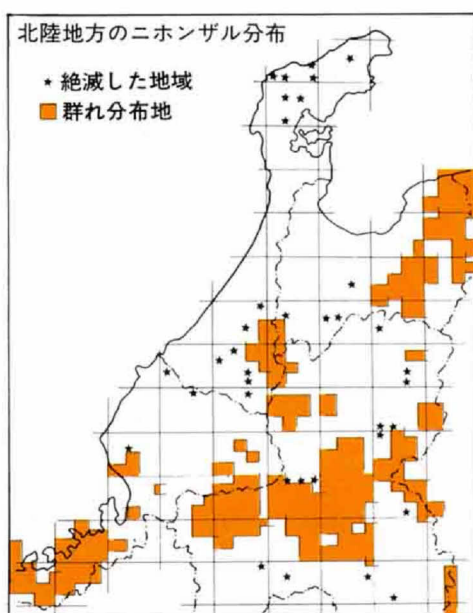
夏の間は、標高1000m以上の森の中に生活しているので、彼らの動きはなかなかつかめません。登山者等からの情報もありますが、群れの数が多くなった現在では、どの群れかを特定することは難しくなってきました。

しかし、山が白一色になる冬には、低地へ降りてきて、観察しやすくなり、群れの大きさや遊動域が見えるようになります。現在石川県には、15群、約500頭が分布すると考えられます。

白山山系のニホンザルの群れ

群名	頭数
カムリ A	62
C	22以上
D	15-20
E	7以上
タイコ A1	60-70
A2	20以上
A3	20以上
B1	30-40
B2	30-40
クニミ	40-50
オダニ A	50-60
B	30-40
クロダニ	30-40
ガラダニ	20以上
タカサブrow	30-50
尾上郷	3-5群: 100-150

合計
18-20群 550-700



(環境庁昭和53年に加筆)

ほとんどの群れは手取川流域に分布しています。犀川上流の高三郎山周辺に1群がありますが、人の出入りの少ない地域なのでわずかの情報しかありません。

他に、岐阜県荘川村内、庄川の支流、尾上郷川にそって3-5群が生息することが知られています。白山山系のサルの群れはこれで全てで、ニホンカモシカやツキノワグマが山地全体に広く分布することと比べると、きわめて狭い限られた範囲にだけ分布する動物です。

冬

寿命

サルの寿命は何年かというのは、多くの人の持つ疑問です。しかし、このような野生動物では平均寿命を求めるのはたいへん難しい。なぜなら、厳しい冬にはアカンボウが次つぎに死ぬこともあり、単に平均しては極めて寿命が短いことになってしまいます。

白山の餌付けしたカムリA群では、18才くらいから、みるからに老いたという感じになります。メスでは、子を生まなくなり、そして、20才くらいまでにほとんどが姿を消し、人目につかないところで静かに土に返っているものと思われま

ここで最も長生きしているのは、約25才と推定されているカムリA群の「キク」と名づけたメスです。初めて餌付けに成功したときには、既にオトナになっていて、長い間群れ内の最強のメスであり、多くの子や孫を育て、最大の家系を持っています。腰はやや曲がり、目は少し弱くなっているようで、歯も何本か欠けています。

白山のサルは、南日本のサルに比べて、やや寿命が短いようです。大分県高崎山では、28才まで子を産んで32才で元気にしているメスがいます。群れの第1位オスには32才のものもいます。やはり白山の冬は厳しく、身体のだこかがおかしくなれば、春まで生き伸びられないのでしょう。



大雪の冬には、アカンボウの半分以上が冬越しできない



キクと呼ぶメスは、カムリA群の最年長で、推定25歳

山で死体が見つかることはほとんどありません。冬の間の数の変化や、豪雪の昭和59年に大量に死亡したときのようすをみると、真冬の寒さで死ぬものは少ないようです。若葉の豊かな春もまもなくという3月から4月になって、栄養の蓄えもなくなり力尽きるものが多くなります。

ブナオ山観察舎

山の木が葉を落とし、雪が地表を白くすると、サルやカモシカの姿を見つけやすくなります。望遠鏡で野生の動物を観察してみませんか。

開館期間

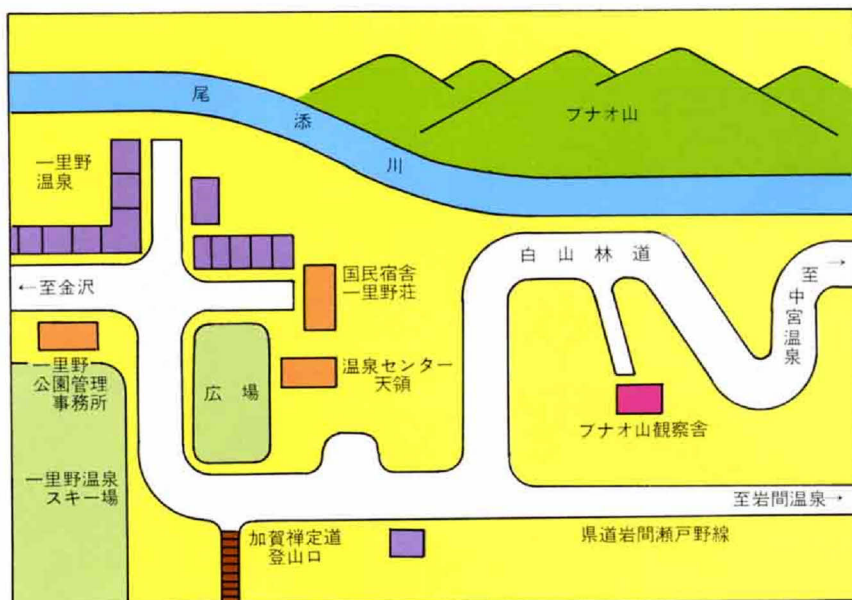
11月20日から 5月20日
毎日 午前10時から午後3時
ただし悪天候の日は閉館することがあります。

観察指導

火・水曜日を除く毎日、動物を探すお手伝いをしたり、生態の解説をする係員が駐在します。

服装など

館内には暖房がありませんので、暖かい服装で。長靴など雪の上を歩ける足ごしらえで。



サルとのつきあいかた

人間が畑でつくっているような作物は、サルにとっては大好物ばかりです。全国各地でサルによる農作物の被害が起り、各地で、被害防除のためにやむなく何頭かのサルまたは群れを捕獲しています。そのため地方によっては、サルの数が減り、動物保護の点からも大きな問題になっています。

白山山ろくでも昭和20年代まで、山に出作りして焼畑や炭焼きが盛んに行なわれていたころは、サルの畑荒しには困っていました。また、食用や薬用にもなったので、機会があれば捕獲していました。その頃には、ほとんど人の入れない山奥にだけサルの群れが分布していました。しかし、その後、山で畑を耕すこともしだいに少なくなり、昭和22年から狩猟禁止になったこともあり、サルを追うことはなくなりました。

山奥で畑をしなくなってからサルの被害もおこらず、白山は全国でもまれなほど問題の少ない地域であるというのが誇りでした。ところが近年になってサルの群れが増え、人家やスキー場の周辺にまで出て来るようになり、ときどき農作物を荒すようになってきています。夏にハナレザルが、豆やトウモロコシ畑に来たり、晩秋に群れが大根畑に来ていたずらをします。山の木の実が不作で早く積雪の来た年に被害が目立ちます。

サルが村の近くへ来るようになったきっかけは、カキを採って干し柿にすることが少なくなり、雪が積っても熟したカキがたぐさん残っていること、そこへサルが来ても人びとがだまって見ているからと考えられます。一度うまい食



カボチャや豆類が実る頃畑へやってくる



ダイコンの一部ずつかじるので被害が目につく

食べ物のあるところを知ってしまうと、人目を盗んで畑へやって来るようになります。人里近くへサルが現れたら、被害のあるなしにかかわらず、追っばらっておく必要があります。「サル達よ、山へもどりなさい。」、そして、「十分に広い森は確保してあげるから。」と。

サルは、広い範囲を遊動し、さまざまな食べ物を採っています。サルが住んでいるということは、その森の自然が豊かで多様性のあることを示しています。そのような豊かな山を確保しておくことは、動物の保護だけではなく、治山治水のためにも、観光資源としての山の価値を高めることにも通ずるのです。



白山麓では、多雪と急傾斜のため、山地開発や人工林化は遅れている。白い部分は天然林で、野生動物が多い

文・構成： 水野昭憲
写真： 白山自然保護センター
滝澤 均
志鷹敬三

発行日	昭和63年 3月 10日
編集発行	石川県白山自然保護センター 石川県石川郡吉野谷村木滑 Tel. 07619-5-5321
印刷	株式会社 橋本確文堂

白山の自然誌 8

ニホンザルの四季

